

2025年8月1日付組織数

2,558名 (前月比-24名)

2025年1月1日付組織数2,652名



土建国保の方は必ず 設立前に相談を

法人化は東京土建へ



発行所
東京土建一般労働組合
小平東村山支部
小平市仲町381番地

電話 042-342-2846

FAX 042-342-2848

発行人 染矢 憲広

ホームページ

https://www.dokenkodahiga.jp



80年前の戦争の記憶

15歳の遺影

「お国のために」予科練に志願

◆予科練とは...「海軍飛行予科練習生」及びその制度の略称。第一次世界大戦以降、航空機の需要の高まりを受け、欧州列強に遅れまいと当時の海軍がより若いうちから基礎訓練を行い搭乗員を育成する制度を創設。1930年に始まってから太平洋戦争が終わるまでの約15年間に全国から24万人が予科練に入隊し、うち約2万4千人が戦争に参加。特攻隊として出撃したものも多く、戦死者は8割の約1万9千人にものぼる。



重本 晴男さん



しげもと はるお
1929年5月生まれ
徳島県出身
知り合いの大作に誘われ、
東京オリンピックの年であ
る1964年に組合加入。
支部の組合員の中で最年長
の96歳でありながら、野火
止分会1群の群長・群会計
を現役で務める。

今年は戦後80年を迎えます。今回は特別企画として、支部で最年長の組合員である重本晴男さん(96歳)に自身の戦争体験について話を伺いました。

重本さんが生まれたのは1929年。物心がついた頃にはすでに日本は戦時中でした。1937年12月、重本さんが小学2年生の時に日本軍が南京を陥落。重本さんは「日清・日露戦争を含め、日中戦争も侵略戦争だったが当時は誰もその事実を知らない。日本は神の国だ」という教育ばかり受けていた」と語るように、当時の子どもたちは国家主義、軍国主義に支配されていました。そして1941年12月、日本軍がハワイ真珠湾の米軍施設を襲撃して太平洋戦争がはじまりました。

軍国主義教育が子どもたちを戦禍に

太平洋戦争末期
最後まで戦局を知らず

1945年4月、重本さんは松山海軍航空隊に入隊。「軍人精神を叩き込み強い日本兵を育てるために2日に1回はほつぺたをひっぱたかれ、1週間に1回は尻をバットで叩かれた」と当時を振り返ります。2ヵ月後には、特攻隊の基地がある九州の鹿屋に配属されました。そこで重本さんは「基地の中には日本軍の飛行機の残骸だけ。特攻隊

に乗るための飛行機は一台もなかった」ことに驚いたといいます。情報統制によって、重本さんは日本軍が劣勢に陥っていることを知らなかったのです。

1945年8月15日、終戦を迎えた日、重本さんは一度も戦地に赴くことはなく、まだ鹿屋基地にいました。重本さんが終戦を知ったのは、そこから1週間以上経った8月23日。軍隊が集められ上官に「身支度をしてお郷へ帰れ。また招集があったら来い」とだけ言われたそうです。日本が『敗戦した』という事実が、軍隊からは最後まで伝えられることはありませんでした。沖縄が戦場になっていたことや原爆投下についても、終戦後に新聞を読んで初めて知ったそうです。

最後に現在の世界情勢について問われると、重本さんは「あれだけ大きな戦争で世界中が空襲などのひどい目に遭っているのに未だにイスラエルやロシアで戦争が起きている。誰かの金儲けになるような戦争はやるべきではない」と平和への思いを話してくれました。

用水路

8月も日本列島では猛烈的な暑さが続いている。5月21日に岐阜県で初めて猛暑日を記録したのを皮切りに、6月・7月も酷暑が続いた。7月29日には猛暑日地点は322を記録し、昨年8月4日の301地点を超えて過去最多を更新した。まぎれもない異常気象だ。▼一昔前はここまで暑くなかったはずだ。気になって気象庁のデータを調べてみた。私が小学6年生だった2000年7月の平均最高気温は31.6℃・最高が34.9℃、2024年7月は平均最高気温が33.5℃・最高が37.3℃。猛暑日の日数で比較すると、2000年が年間1回、2024年が年間20回。ここでは単年の比較しかできないが、全体の推移でも気温の上昇傾向と猛暑日の増加は明白だ。▼その変化に伴い、夏が長くなり春と秋が短くなった印象を受ける。日本は四季から二季の国になり、この異常気象も異常ではない。▼6月からはすべての事業者に対して熱中症対策が義務化された。建設業でも、作業時間減少に伴う工期の延長など、働き方を見直す必要に迫られている。(横)

国民平和大行進

核兵器のない世界
非核平和の日本を

核兵器の廃絶を願い、全国から被爆地の広島・長崎を目指して歩く国民平和大行進が東村山地域（7月21日・参加約50名）・小平地域（7月22日・参加約60人）でそれぞれ開催されました。両日と

炎天下の中
110人超の仲間が集う

もうだるような暑さの中、多くの仲間が非核平和を訴え、次の地域にバトンを引き継ぎました。なお、2025年原水禁世界大会には、小平原水協からは小平里枝さん（小川分会）、加賀谷溪さん（書記）の2名が長崎大会に代表派遣されました。

→決勝戦の攻防に皆が注目した（左が準優勝の小倉一彦さん）



←山本5段による講義

局の決勝戦が開始。Aクラスのお弁当タイムの後は、山本5段による初心者講座。初心者でもわかる三間飛車の楽しさを勉強しました。そしていよいよ自由対局の決勝戦が開始。Aクラス

王将の決勝戦は、第1回と10歳の田中眞人さんと小倉一彦さんの対局となりました。初めは小倉さんの攻めで始まり、このままいくかなと思いきや、最後はうっちゃりて田中さんの勝ちとなりました。

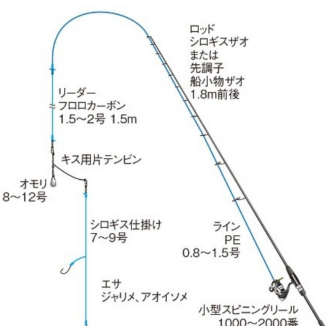
第3回王将は田中眞人さん、準優勝は小倉一彦さん、Bクラスは菊地新多さん、Cクラスは菊地智彦さんでした。

釣りの楽しさを知った
「シロギス釣り」

私が釣りとの出会ったのは、釣り好きの組合員、Kさんからシロギス釣りへのお誘いがきっかけでした。今から20年ほど前、当時の私にはこれといった趣味も無く、休みの日は家でゴロゴロしているような人間でした。そんな時、Kさんと船

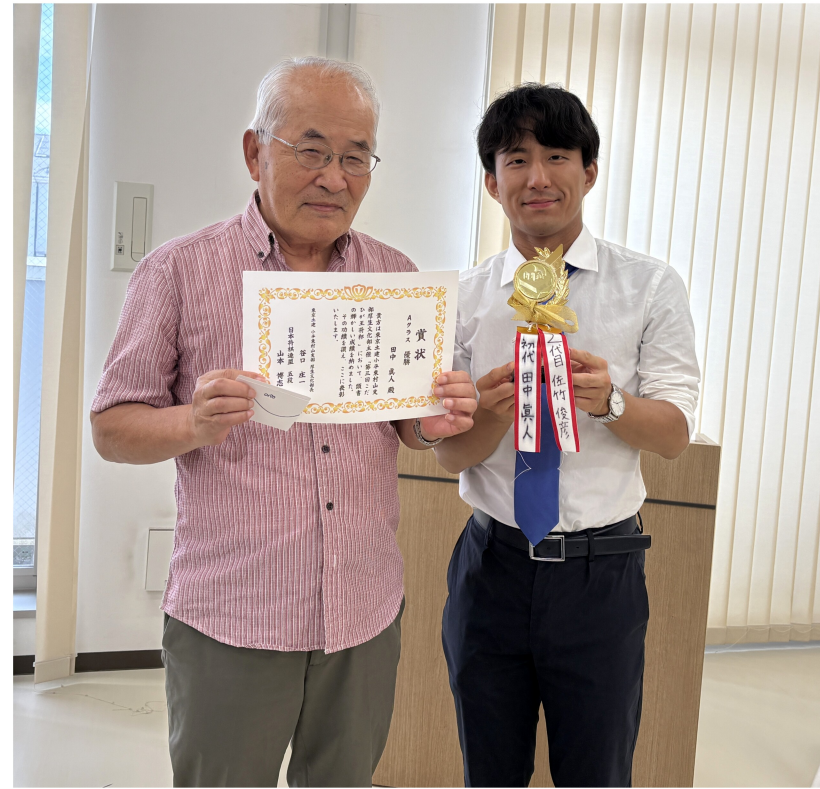
釣りに。私はそれまで船とフエリーに乗った程度で、小さい釣り船には乗ったことがありません。「兄弟船」演歌の世界なのか？わくわくしつつ、湘南・茅ヶ崎港から出船。船は波を切りながら走りポイントに到着。Kさんからシロギスの釣り方を教わりました。

シロギス釣りは、天秤（てんびん）に錘を付けて、針にイソメというミズのような生き餌を頭から針に通し、3〜4センチくらい垂らして餌付けします。そして、仕掛けが絡まないように船下へ落とします。夏の時期は浅場に居るので、おそらく水深は15m前後です。シロギス釣りの基本的な誘いは、天秤の錘を海底に着底させ、底から20〜30センチ浮かせてから落とします。それを3回ほど繰り返してから竿



【記・奥田八志書記】

初代王者の返り咲き



↑第3回こだひが王将杯を制した田中さん(左)と山本5段(右)

田中眞人さんが優勝

厚生文化部主催 第3回こだひが王将杯

【小川・竹野幸一 教宣部員】厚生文化部主催の第3回こだひが王将杯が7月27日（日）に開催され、3年連続で棋士の山本博志5段を招聘し、19名の仲間が参加しました。

現場訪問 公共7現場・民間2現場



↑東村山市内の小学校の現場

「賃金が安く職人が入ってこない」51名から現場の実態を聞き取る
7月28日に賃金対策部と労働対策部、主婦の会が連携して、市内現場の訪問行動に取り組みました。両市担当課には事前に「賃金が安く職人が入ってこない。組合に頑張ってもらいたい」と激励の声を貰いました。

熱中症対策は各現場で力を入れており、タブレットによる塩分摂取、空調服や送風機、エアコン付きの休憩所が活用されていました。今後は、公契約条例制定・改正運動の前進を目指し、現場訪問の結果を自治体に届けていきます。